

中野勝清

奈良公園に憩う

一人ひとりの無関心が、墨汁を垂らしたようにむなしく漂い
やるせなさとな甲斐なさで、じっとパソコンをにらみつける

そのおもいは到底言葉にならず、愚痴で満ちた磁場は容赦なく活力を損なう
ふつと目を上げると

若芽の銀杏の木立のむこうから、陽光に照らされた東大寺の伽藍が見える
生への衝動が「外へ出よ」とどこからともなく強く促す

深緑の春日山と薄茶の若草山が隣り合い

薄緑の草木の合間には、淡く点々と桜が花開いている

冬毛がまばらに残る鹿たちは、寝ぐせのようでどこか眠そうなのに
抜かりなく鹿せんべいをうかがっている

うららかな日ざしと自然に包み込まれている安堵

生命を根底で支えているその理に、ただ深く頭を垂れる